月刊
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成19年6月1日発行　第31巻第6号通巻第357号

みんぱく

国立民族学博物館
2007
6

特集 ペット

地の先へ。
知の奥へ。
みんぱく
30th
Anniversary

エッセイ

世界へ 世界から

モンゴルで落語

笑福亭仁智

「到着地ウランバートルの気温は、摂氏マイナス二四度でございます」そう言ったに違いない。英語で、客室乗務員が何やらアナウンスしているなかで、マイナス二四だけ聞き取れた。それでも今年は暖冬というチンギスハーン国際空港に降りた。

二〇〇七年は、日本とモンゴルの国交樹立三五周年で「モンゴルにおける日本年」として、さまざまな日本文化が紹介される。その記念事業として「日本伝統芸能・落語会」が、在モンゴル日本国大使館と会場となる国立ドラマ・アカデミック劇場の主催で開催されることになり、わたしが落語をすることになったのだ。

「モンゴルで落語をしませんか」と声をかけていただいた大使館員、近藤和正氏の出迎えで市内へ。モンゴルは、昨年建国八〇〇年でやたらチンギスハーンが目に付く。空港名・ホテル・紙幣はもちろん、スフバートル広場の政府宮殿には、奈良の大仏ほどもあるチンギスハーンの像が広場を見据えている。郊外には巨大な騎馬像を建設中で、まさにチンギスハーン一色である。

ウランバートルは意外にも一〇〇万都市。ビルが建ち、周辺には地方から来た人びとがゲルで暮らしている。街行く人は、みな体格がよく、寡黙で色浅黒く無骨に見える。落語を見て笑うのか。不安がよぎる。車中今回のイベントのフルカラーの立派なチラシを見せてもらう。また、あれが会場ですと指差された宮殿風の建物の横には、たたみ四枚分もある看板にでかでかとわたしの舞台写真が踊っていた。いつのまにか、事が大層になっていないか？わたしの心臓も少し踊り出した。さらに、公演当日には市橋康吉駐モンゴル日本国大使、モンゴル文部科学副大臣が来場されると聞き、ますます道行く人が寡黙に見えた。

モンゴルでは大相撲が大人気だと聞き、「大安売」という弱い相撲取りと町人の噺（はなし）をやることに決めた。まず落語というものをわかってもらうために通訳を交えながら話を進め、落語は字幕スーパーで見てもらうことにした。しかし客席には、町で見かけたような人たちが静かに座っている。

笑芸は、まずお客さんと打ち解け心が通うことが第一歩である。「はじめまして。日本から来た笑福亭仁智と申します。サエンバイツガーノー（みなさんこんにちは）」拍手をいただくと、「バイラルラー（ありがとうございます）」一瞬にして空気が和んだ。あとは小話、落語、玉すだれ、ことばは違えど笑いどころは同じである。そしてお囃子（はやし）紹介でモンゴルの童謡を出囃子にして演奏すると、会場は手拍子に包まれ、最後はなんとスタンディングオベーションを初体験した。

終演後のレセプションに参加した一様に体格のいいモンゴルの人たちは、みな相好（そうこう）を崩し、人懐っこく、しかも紳士で、握手したその手はでかくて力強かった。そして「面白かった」と言ってくれた。

次の日モンゴルの空は、どこまでも青く澄んでいた。

しょうふくていじんち／1952年大阪府生まれ。落語家。1971年笑福亭仁鶴に入門。特に自作の創作落語は評価が高い。「上方落語喜講」を主宰し、チャリティー寄席での収益金を寄付。2001年より「お寺数珠つなぎ落語会」を全国で公演。1998年度大阪文化祭賞奨励賞、2003年度文化庁芸術祭優秀賞受賞。（社）上方落語協会理事。同企画委員長。

月刊みんぱく 目次

JUNE 2007 月刊みんぱく 6

01 エッセイ 世界へ世界から
モンゴルで落語
笑福亭仁智

02 特集 ペット
人とペットの共生社会
吉田 眞澄
古代人が飼ったペット
松井 章
ペットの最期を看取る
—日本と韓国のペット葬儀
フェルトカンプ・エルメル

極北のペット
岸上 伸啓
アマゾンの桃太郎
中牧 弘允
ウンがつく街—パリ
三島 禎子

08 モノ・グラフ
日本コロムビア外地録音
福岡 正太

10 地球ミュージアム紀行
アパルトヘイトの記憶
飯田 卓

11 表紙モノ語り
ケツァル鳥
八杉 佳穂

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
クルアーンのグッズ
小杉 麻李亜

15 人生は決まり文句で
食物には食べる人の名前が書いてある
金谷 美和

16 外国人として生きる
84歳、今が青春
—呉福徳（オ・ボクトク）さんの異郷暮らし（タヒャンサリ）66年
金 美善

18 地球を集める
民博アラビアンナイト・コレクション
西尾 哲夫

20 生きもの博物誌
ビクーニャの保護と村おこし
大山 修一

22 フィールドで考える
音楽は国境を越えて
錦田 愛子

24 開館30周年記念事業の案内
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ

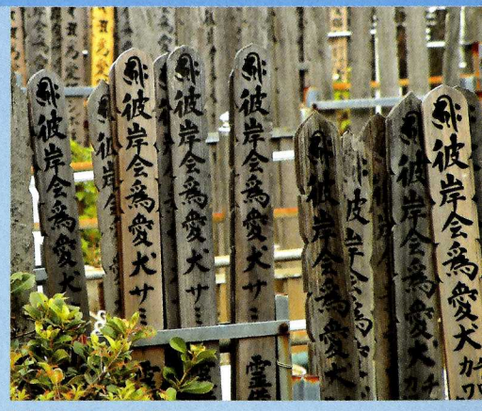
特集

ペット

ペットブームが世界へ広がりつつある。ペットをもつ民族のあいだではその家族化がすすみ、ペットをもたない民族のなかにも愛玩動物が誕生しつつある。特集では、人とペットとのこれからの共生について、古今東西の事例から考えたい。

オウムとあそぶ子ども（アマゾン）

片時も離れない老人と最愛の友（ミュンヘン）



東京都内のペット霊園

人とペットの共生社会

吉田 眞澄
（よしだ ますみ）
帯広畜産大学教授

人との関係に変化

人とペットの関係を「共生」と表現するのは間違いであると考える人は多い。しかし、イヌやネコが人の社会に入ってきたときの状況を見ると、共生ということばのカテゴリーに入りうる関係が明確に存在した。人とペットの関係がその延長線上にあり、心の問題を含めた相互互恵の関係を考えると、それを共生ということばであらわしうることを否定できない。

ペットはイヌとネコに代表されるが、人が集団生活を重視する場合はイヌが、個人生活を重視する場合はネコが、より重要な位置を占める。イヌの祖先が集団生活をし、ネコの祖先が単独で生活していたことを考えると当然の結果である。

イヌも乗れる地下鉄（ミュンヘン）

ドッグラン（ニューヨーク）

都市化が進めば進むほどイヌの飼養数が減り、ネコが増えて、飼養数が逆転することにも、住環境の問題に加え、イヌとネコの本来の生活スタイルの違いが影響している。現在では、ペット先進国の大多数で数の逆転現象が生じているが、わが国は、イヌ人気が根強く、東京を除くすべての地域でイヌの数がネコの数を上回っている。個人より集団を大切にする風潮があるかどうかを含め、その原因を探ることには、それなりの意味がある。

イヌとネコがペットの代表とされるのは、飼養数とともに、人との関係の濃密度も見逃せない。長期にわたるペットブームで飼養数が増え続けた結果、現在では、一三〇〇万頭を超すイヌと、一二〇〇万匹を超すネコが飼養されているといわれている。世帯数との関係で単純計算をすると、二世帯に一頭以上のイヌかネコが飼養されているという大変な数字になる。数もさることながら、人との関係も変化し、多くの飼い主が、ペットを家族の一員と考えるようになった。戦後、家族関係に大きな変化が生じたにもかかわらず、家族について十分な整理がされないままペットブームを迎えたところに一因があると思われるが、家族とペットの両面からの検証が必要である。

求められる社会システム

いずれにしても、ペットは、個人、家族、社会のそれぞれとの関係を深めており、ペットが現代社会にとって重要な問題になっていることは間違いない。ペットを飼っている人、いない人、好きな人、嫌いな人など、ペットに対する立場の違いや考え方の違いに関係なくすべての人がペットを理解し、それぞれの立場から知恵を出し合い、ペットの愛護や福祉の問題をも視野に入れ、今以上に納得できる社会システムを構築することが求められている。それができて初めて、飼い主とペットの関係を越え、社会システムとして人とペットの共生が実現されるのである。

古代人が飼ったペット

松井 章
（まつい あきら）
奈良文化財研究所
環境考古学研究室室長

イヌの起源

動物の子どもはおしなべて可愛い。ヒトを含む動物は、その子どもの無防備な可愛らしさによって身を守り、生き延びようとしているとすらわたしには思える。家畜化はおそらく、野生動物の子どもを愛玩することから始まっただろう。オオカミは群れをなして、人びとの周囲を徘徊して食べ残した屍肉をあさるが、親からはぐれたパピー（オオカミ、イヌなどの仔）が人間に飼われ、やがて狩りを手伝うようになったというのが、イヌのありえる起源だ。考古学的には三万年以上前、中央アジアに住んだネアンデルタール人や、二万年前にウクライナの氷原でマンモスを追った現生人類の遺跡から、小型化したオオカミ類似の骨が出土するのが、イヌに近づいた証拠とされている。

しかし、近年の分子生物学の発達によって、イヌの歴史も再考を余儀なくさせられている。出土骨に残るミトコンドリアDNAの分析の結果、イヌがオオカミと分岐したのは、一〇万年以上前にもさかのぼるというのだ。このような年代は荒唐無稽としか思えないが、分子人類学者らが同じ方法によって、現生人類の起源が十数万年前にアフリカを出た一女性であるというイブ仮説を提唱した際、人類は世界各地で平行進化を遂げたと主張する形質人類学者らの拒絶反応と、その後の彼らの完敗ぶりから考えると、イヌの起源もそれくらいさかのぼる可能性も想定内とせねばならない。

筆者が監修した新潟県立歴史博物館の縄文犬のジオラマ展示のレプリカ。精悍（せいかん）さを強調するために毛皮をとおして肋骨が透けて見えるよう工夫した

佐賀市東名遺跡から出土した縄文早期の縄文犬（中央）。鼻筋がとおったところはニホンオオカミ（奥）と共通し、現生の柴犬系の雑種（手前）の鼻筋とは異なり、大きさは両者の中間に位置する

東大阪市日下貝塚から出土した縄文晩期の犬の埋葬。首を曲げ、四角く葬られた姿勢は縄文人の屈葬と共通する

遺跡から続々と

しかし実際に遺跡から愛玩動物が出土するのは、西アジアで一万五〇〇〇年から一万二〇〇〇年前のことで、特にイスラエルのアイン・マラッハ遺跡での年取った人間の墓に、オオカミかイヌのパピーが葬られていた例や、一万年から九〇〇〇年前のパキスタンのバルチスタン地方のある遺跡の同じ墓穴に葬られた一人の人間と五匹のキツズ（子ヤギ）の例があり、日本でも愛媛県上黒岩洞穴の一万年近く前の土器の層から出土したイヌの埋葬例がある。ネコもこれまでは約四〇〇〇年前のエジプト古王朝のネコのミイラが最古とされていたが、最近、キプロスの九五〇〇年前の新石器時代早期の遺跡で、人とともに埋葬されていたネコの例が報告されている。もっともこの遺跡では、この島に生息しないキツネも出土しているので、島の人びとは、手当たり次第に野生動物の子どもをもち込んで可愛がっていたのかもしれない。

古代エジプト人がハイエナやシマウマを飼い慣らそうと努力したことはよく知られ、そのほかの地域でも古代人がさまざまな野生動物を飼い慣らそうと試みたが、結局、どれもものにならず、人間に可愛がられて家畜となることのできた動物は、自然界のうちごく少数に留まったというのが真相である。

ペットの最期を看取る
―日本と韓国のペット葬儀

VELDKAMP, Elmer
（フェルトカンプ・エルメル）
東京大学総合文化研究科

特集 ペット

伝統的で手厚い供養

近年、日本だけでなく中国・韓国などでもペットの人気が急上昇し、ペット文化にまつわる商品やサービスの売買は、玩具、衣服などおもにペットの生前に集中しているが、動物の寿命は人間より短い。飼い主には、愛犬・愛猫をあの世に見送る不幸な日が必ず訪れる。ペットが亡くなった際、土地をもっている人ならその遺体を庭の片隅に埋めることは可能だ。しかし、自分の土地をもたない人が多く、遺体の処理法が厳しく規定されている都市部では、それを代行するためのサービスとして「ペット霊園」が登場した。

日本の場合、葬儀だけで終わらず、その後も人間と同じように年忌供養をおこなう飼い主が多い。欧米と比べてはもちろん、アジアの国々と比べても特殊であろう。いちばん古いペット霊園は約一〇〇年の歴史をもっているが、都市を中心に本格的な増加や定着を見るようになったのは昭和四〇～五〇年代である。東京だけでも一〇〇カ所を超えている。

霊園には、ペットのお墓の墓石のかたちや碑文、またロッカー式の納骨堂に飾ってあるミニ位牌やお香立てのような供養グッズなどがあり、飼い主のペットに対する愛着が詰まっている。また彼岸やお盆に「ペット供養祭」を開く霊園も多く、日本のペット葬儀には、伝統的な動物観と死者への手厚い心遣いが反映されているといえる。

食用との落差

韓国でも一〇年ほど前からイヌを中心にペット人気が急上昇しており、都市部には日本をビジネスモデルにしたペット葬儀社がわずかだが登場している。ただしソウルなどは環境規定が厳しく、火葬場と霊園が郊外の産業地区にあるなど日本に比べて「未開発」の部分は残るし、ペット葬儀社は法律的に曖昧な存在ですらある。しかし日本と比べれば、仏教の干渉がほとんど見当たらず「自由」なかたちである。サービス内容が未だ固定していないため、客の好みでリムジンの送迎などのオプションを依頼できることが特徴的である。

ペット霊園の歴史がまだ浅い韓国だが、このように人びとの関心は高く、二〇〇六年の動物保護法改正案に「ペット葬儀」ということばが盛り込まれるまでに至った。ただこれまで韓国でイヌといえば食用でもあり、ペットとして愛されるイヌのイメージとの落差は大きい。この新旧イメージの混乱から、近年のペット優遇策には「贅沢すぎる」という批判の声もなくはない。近年よく耳にする「ペットの家族化」は、今後一体どこまで発展するのだろうか。

飼い主の愛着が詰まったペット納骨堂（韓国）

彼岸にペットのお墓を掃除するカップル

特集 ペット

極北のペット

岸上 伸啓
（きしがみ のぶひろ）

本館先端人類科学研究部

イヌイットの少年とペットのイヌ

極北の狩猟民イヌイットが家畜化した動物は、イヌだけであった。それはペットではなく、猟犬やそりを引くイヌであった。イヌイットは極北という厳しい環境のなかで生きていくために、イヌを厳しく訓練し、あまやかすことなく接してきた。南からやってきた欧米人の目にはイヌイットがイヌを不当に手荒くとり扱っているように見えたため、イギリスの愛犬家団体は、一九六〇年代に「イヌイットはイヌを虐待している」とマスコミを通じて世界に訴えたことさえある。

カナダの極北地域では一九六〇年代に犬ぞりは、スノーモービルにとって代わられたため、イヌの数が激減した。一九八〇年代からエコツーリズムや犬ぞりレースのためにイヌの飼育が極北の各地で再開されたが、かつてのような生活のための使役動物としてではなかった。

一九八〇年代半ばにわたしが滞在していたイヌイットの家庭では、子イヌが屋内でペットとして飼われていたが、当時としてはめずらしいことであった。ある日、わたしは子イヌがいないことに気づいた。そのことを家の人に聞いてみると、子どもが目を放したすきに、近所のエスキモー犬にかみ殺されたという。わたしはこのとき、事件そのものより飼い主がペット犬の死をほとんど悲しんでいない様子に驚いてしまった。日本では、ペットとして飼っている動物が死ぬと多くの飼い主は、あたかも家族が死んだようになげき悲しむ。それに比べると、イヌイットの反応はあまりにも冷淡であるように思えた。人間と動物との関係は、文化によってかなり違うものだということを痛感した。

それから一〇年が経った一九九〇年代後半には、イヌイットのなかにペット犬のほか、ネコや小鳥、さらに金魚や熱帯魚を飼う人が増え始めた。村のなかでの仕事が原因でストレスをためているイヌイットは、愛玩動物を飼育すると心が癒されると語る。イヌイット社会では、動物と人間の関係が大きく変化しつつあるようだ。これもグローバル化やカナダ化の一面といえようか。

アマゾンの桃太郎

中牧 弘允
（なかまき ひろちか）

本館民族文化研究部

アマゾンは生物多様性の宝庫である。動植物の種類において、その右に出る地域はないかもしれない。しかし、先住民のペットとなるとイヌとサル、それにオウムなどの鳥が思いうかぶにすぎない。それ以外は家畜かペットか判然としない。熱帯魚や昆虫を愛玩しないことだけは確かなようだが…。

わたしが調査したブラジル・アマゾンの先住民の村では狩猟用にイヌを飼っていた。放し飼いであり、過剰な愛情をそそいでいるようには見えなかった。また、撃ち殺した母ザルにしがみついていた子ザルに餌をあたえ、かわいがっている姿を見たこともある。母は食用、子はペットとなったので、複雑な気持ちがした。つかまえたヘビやカメを見せてもらったこともあるが、ペットとして飼うわけではない。いかにもペットらしいと思ったのはオウムである。風切り羽を切られたオウムは遠くに飛ぶことができず、子どもたちの格好の遊び相手となっていた。大型のコンゴウインコも飼っていたが、羽根飾りを作るわけではなかった。別の民族では、コンゴウインコの羽根は仮面や装飾用にも使用されるので、一挙両得といえる。

一九三八年に採取狩猟民ナンビクワラを調査したレヴィ＝ストロースは多くの写真を撮った。そのなかにはイヌがよく写っている。また、少女の頭に子ザルが乗っかっているかわいらしい写真も何点かある。その一匹をレヴィ＝ストロースは少女が欲しがっていたものと引き換え、旅の最後までペットとして愛玩していた。彼の名著『悲しき熱帯』のなかでは、サルは髪にとりつくだけでなく、その尾を首に巻きつけ、あたかも「生きている帽子」になると描写している。移動のときには、オウムやニワトリは負い籠（かご）のてっぺんに止まり、他の動物は腕に抱かれるとも記している。ナンビクワラは、桃太郎伝説ではないが、イヌ、サル、トリをしたがえて移動していたのである。

ウンがつく街—パリ

三島 禎子
（みしま ていこ）

本館民族社会研究部

街を歩くときには気をつけたいイヌの「落し物」
（撮影　樫永真佐夫）

パリは世界中から人が集まる街である。多様な人種があふれていても、パリならではの習慣というものがある。イヌが手綱を引かれるのはどこでもありふれた風景だが、それに準じてだろうか、ネコやヤギを同じように引き回している人がいる。それだけでも十分に奇妙なのに、勝手気ままの代名詞のようなネコが、ペットは手綱で引かなければいけないという人間の規則に適応して、イヌの散歩を習得しているのはさらに不思議である。

イヌに関して言えば、これまた不思議なことに、路上で吠えるイヌに出くわしたことがない。犬恐怖症のわたしにはうれしい限りである。パリのイヌは飼い主以外の人間や街ですれちがう他のイヌにまったく無関心である。においを嗅いだり、脇目をふったりすることもない。イヌを飼ったことがないわたしには、それが飼い主に忠実なイヌの姿なのかどうかはわからない。むしろ、石造りの集合住宅の一角で、孤独な一人住まいの老人や独身者とともに暮らすうちに、イヌも没コミュニケーションに陥ってしまったように思える。それとも人間世界に入り込んで、イヌであることを忘れてしまったのだろうか。フランスのドッグフードには精神安定剤が入っているなどという話がまことしやかに聞こえる。

このようにイヌの都会生活マナーは申し分ないのだが、飼い主はイヌの「落し物」に無頓着である。おかげで、パリの街を歩くとウンがつく。飼い主はパリ市に「犬税」を納めると、路上の清掃を免除される。何年か前の税額は数千円程度だったと記憶している。「良識ある」パリ市民は税金を納め、アフリカからやって来る出稼ぎ労働者が路上の清掃をする。路肩を流れるセーヌの水も清掃のためである。いつもぬれている路上は厄介なものだ。冬は路面が凍りつき、外を眺めながら座っているカフェの客の前ですてんと転ぶはめになる。

この清掃というのがまたふるっている。パリ市の緑色の清掃車を見つけたら、なるべく早く風上に退避したほうがいい。ブラシで路上をこすりながら、ものすごい水しぶきを広範囲に撒き散らすのである。ウンがつくのは足元からだけではない。

モノグラフ

日本コロムビア外地録音

福岡 正太（ふくおか しょうた）
本館文化資源研究センター

原盤のケースに貼られていたレーベル。台湾にて発売された「コロムビア」

銀色に輝く円盤。レコードのようだが、よく見ると普通のレコードとは違う。これはレコードを製作するための原盤である。

日本コロムビア株式会社（現コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社）は、戦前、ソウル、上海、ハルビン、台北などに支店や子会社をもち、それぞれの地域の人びとに向けたレコードを製作販売した。わたしたちは、それらを外地録音とよんでいる。外地録音レコードのプレスは、同社の川崎工場でおこなわれたため、戦災を免れた同工場にレコード原盤が残された。

その後、レコード原盤が廃棄されそうになったとき、その価値に気づいた一人の技術者の努力で、その貴重な資料は今日まで残されることになった。そして一九八〇年代はじめ、その複製録音テープを購入した民博に原盤が寄贈された。公式に民博に登録された原盤の数は六八〇〇枚、レコード六八〇〇面（両面レコードで三四〇〇枚）分にのぼる。

二〇世紀前半、レコードの普及とともに、新しい音楽の楽しみ方が広がった。自宅でくつろぎながら一人で音楽を楽しんだり、そのときの気分に合わせて、手持ちのレコードから好きな音楽を選んで聴くことができるようになった。わざわざ演奏の場に出向いたり、演者を呼び寄せなくても、とても生では聴くことのできない海の向こうの演奏家による音楽でも、楽しむことができるようになったのである。もっとも二五センチ盤で、約三分という録音時間の制約も受けるようになった。

さらに一九二〇年代後半から電気録音が普及すると、音量や音質を電気的に調整することができるようになり、マイクなしでは実現することのできない音楽が生まれるようになった。ささやくようなソフトな歌い声でも、バランスを調整して、楽器の音にかき消されることなく録音することができるようになったのである。まさに、レコードと電気録音は、新しい音楽を生み出したといっても良い。

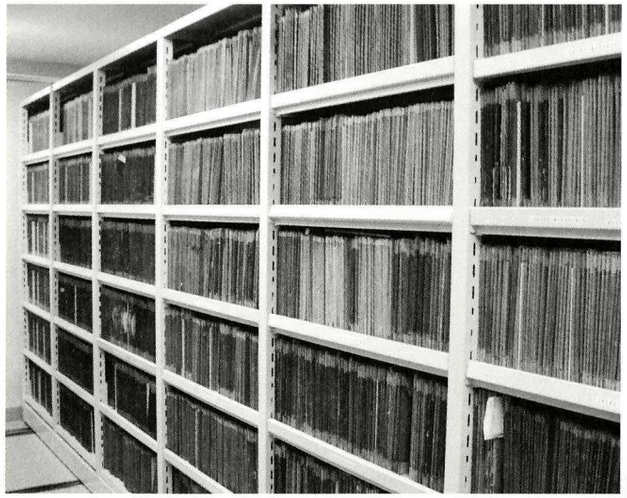
さて、レコードが急速に普及した時代は、日本が欧米の列強諸国に対抗して、アジア各地に進出し戦争へと突入していく時代と重なっている。このような時代を背景とし、日本の統治下に置かれた東アジアでは、どのような音楽文化がレコードとともに展開したのだろうか。

外地録音の存在は、東京や大阪で録音制作された内地向けのレコードが、外地の音楽市場を支配したのではないことを物語っている。政府の方針に沿って教えられた唱歌などは、内地でも外地でもある程度共通していたかもしれない。しかし、内地の流行音楽をそのまま外地にも持ち込んでも現地社会の人びとには受け入れられなかったのだろう。

だからといって、内地と外地の音楽がまったく無関係だったわけではない。外地の流行歌の編曲や伴奏には、内地の人間が加わっていたことが多かったし、そもそも、外地の音楽家のなかには、内地で音楽を勉強した者も少なくなかった。その結果、内地の音楽のメロディーを下敷きにして作られた曲があったり、内地の曲とは知らずに外地の人びとが受け入れた曲もあったようだ。

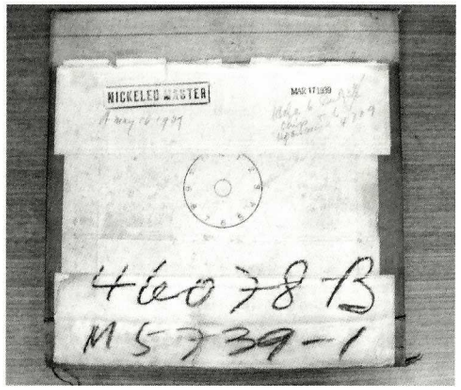
内地と外地は、別の音楽市場を形成していたが、そのあいだにはさまざまな相互関係があった。東アジア音楽の近代史を理解するためには、実際にどのような音楽が生み出され、そのなかで内地と外地のどのようなやり取りがあったのかを明らかにする必要があるだろう。日本コロムビア外地録音は、それを解明するための非常に重要な資料である。

「原盤」には、溝の凹凸が逆のものを含め、いくつかの種類がある



民博の収蔵庫に納められたレコード原盤

原盤のケースに貼られていたレーベル。台湾で発売された「黒リーガル」



原盤の紙製ケース。レコード番号、原盤番号などの情報が書き込まれている

地球ミュージアム紀行

アパルトヘイトの記憶

飯田 卓（いいだ たく）
本館研究戦略センター

ヘクター・ピーターソン博物館、
アパルトヘイト博物館／南アフリカ

博物館をめぐる近年の動きを理解するうえで、「記憶」というキーワードは重要である。記憶というのは、本来は個人的な体験に基づくものだ。しかし、ある種の記憶は、継承され、人類の共有財産となる価値をもつ。そこで、博物館がその役割をはたそうというわけである。

実際、博物館のはたすべき役割は大きい。個人の記憶は、色あせた写真や身近な持ち物、日記や手記、当時の新聞やニュース映像など、さまざまなモノに託される。これら多様な「資料」をそっくり展示できる点で、博物館というメディアは、今もってすぐれた機能を発揮するのである。

とはいえ、実際の展示では、個人の記憶を社会的なものにまで高めることは難しい。えてして、どこにでもありそうな日用品を並べるだけで終わってしまう。うまく観客の関心をひいたとしても、他人の私生活を覗き見させただけ、ということになりかねない。

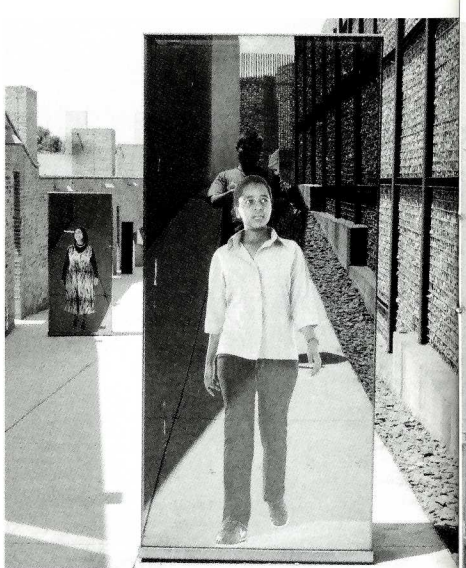
この点、アパルトヘイトをテーマにした博物館は、国家や歴史の冷徹さを観客に実感させる力がある。同じような感覚は、アメリカのホロコースト博物館を訪れたときに感じた。あまりにも大きなうねりが、個人の尊厳を呑み込んでしまうような状況。それを理解するためには、かえって、個人の日常にまで焦点を絞っていくのがよいのだろう。

ヘクター・ピーターソン博物館は、ヨハネスブルグ市郊外で一九七六年におきたソウェト蜂起をテーマとしている。この事件そのものは、当事者にとって、非日常的だったかもしれない。しかし、博物館で展示されている当時の落書きなどは、日常的な静けさのなかで書かれたであろうにもかかわらず、その日常が観客にとってはきわめて異常だったことを示している。

ソウェト蜂起のきっかけは、白人たちの母語のひとつを政府が学校教育のなかで強制しようとしたことにある。これに対して、黒人学生たちは登校拒否によって抗議し、ついには大規模なデモ隊と警官隊が衝突した。ヘクター・ピーターソンは、そのときの犠牲者六人のうちのひとりで、死亡時にまだ一三歳だった。

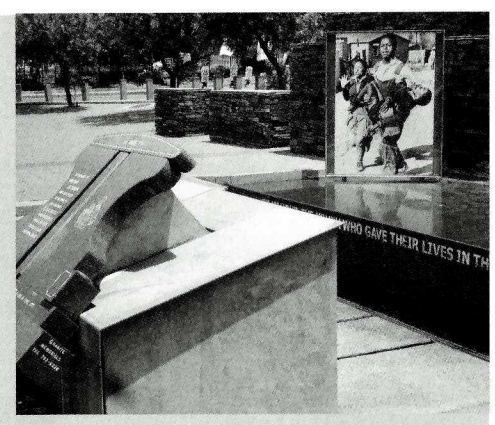
一方、アパルトヘイト博物館があつかう時代は、もう少し広い。ヨハネスブルグが鉱山の町として発展する一九世紀末から、マンデラ氏が大統領として選ばれた一九九四年ごろまでを対象としている。建物の玄関にいたる屋外通路には、さまざまな肌の色の人たちの等身大写真が置かれている。ところが、彼らは無名の人たちではない。博物館の一室には、彼らの身に付けていた所持品が、履歴や手記などとともに展示されている。それを見る観客は、かくも多様な人たちがアパルトヘイトの現実を耐えてきたことに、あらためて驚かされる。

屋外通路の写真をさらに写真撮影し、帰宅後に見なおしてみて、さらに驚いた。等身大の写真は、じつは大きな鏡に貼りつけてあったのである。わたしは、他者の肖像を撮影した気になっていたのだが、そこには、わたし自身が写り込んでいた。ひょっとすると、アパルトヘイト博物館で見たものは、ほかならぬわたし自身の現実だったのかもしれない。



アパルトヘイト博物館の屋外通路。
展示の語り部の後ろには、わたしの姿が
写り込んでいた

アパルトヘイト博物館の入り口。
白人用と黒人用がある

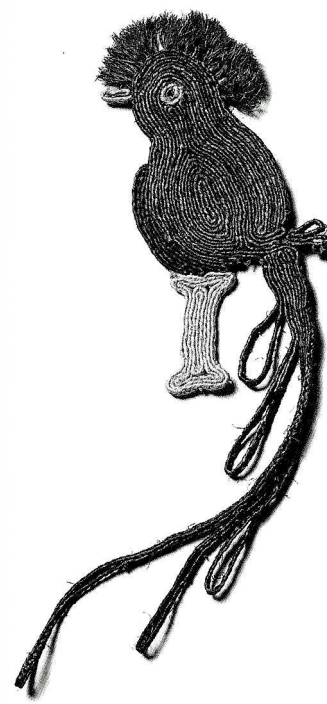


ヘクター・ピーターソン博物館の
近くにあるモニュメント

ケツァル鳥

編物製品（標本番号H192647（表紙左はH192646）、高さ／60.0cm）

八杉 佳穂（やすぎ よしほ）
本館民族文化研究部



ケツァル鳥は、グアテマラでは、国旗や紙幣に描かれていることからわかるように、国を代表する鳥である。通貨の単位もケツァルであるし、そのほか、シャツの絵柄や土産物など、いろいろなものに取りあげられており、知らない人はいない。ところが、これほど有名な鳥なのに、実際にケツァル鳥を見た人はほとんどいない。絶滅に近いために、高地の湿潤な山のなかに生息するケツァル鳥に出会える人は数少ないのである。

ケツァル鳥は、多くの鳥と同じように、オスの方が華麗である。メスは短い尾しかもたないが、オスは一メートルにもなる緑に輝く美しい尾をもっている。そのため、マヤ文明時代（三～一〇世紀）からたいへん好まれた鳥であり、王族の羽根飾りとしてばかりか、鳥の姿そのものも描かれた。また、ケツァルはマヤ文字に取り入れられ、何人かの王や王女の名前に使われた。ちなみに、ケツァルとはアステカのナワトル語であり、マヤではクックという。

グアテマラは、一六世紀にペドロ・デ・アルバラードによって征服されたが、征服のときの戦いにもケツァルは登場する。ケツァル鳥の美しい緑の羽で着飾ったキチェの大将テクム・ウマムは、アルバラードに何度も戦いを挑むが、敗死する。ケツァル鳥の胸が赤いのは、その血に染まったからだという。

さて表紙の資料は、一目でケツァル鳥とわかるほど、見栄えのよいオスの特徴をうまく表現しているが、グアテマラ東部のホコタンでは、こうしたリュウゼツランの繊維をつかった民芸品が数多く作られている。

ケツァル鳥は檻で飼うと死んでしまうそうだ。だから自由の象徴となっている。そうすると、ペットとは不自由の象徴といっていいのかもしれない。

万国津々浦々

クルアーンのグッズ

小杉 麻李亜
（こすぎ まりあ）
立命館大学先端総合学術研究科

世界各地で愛好

あるとき、インドネシアのジャカルタで現地の女性と食事をしていると、彼女の携帯が鳴った。「着うた」はまだなく、「着メロ」がおもだったにもかかわらず、男性の声が朗々と流れてきたことにまず驚いた。しかもアラビア語で、よくよく耳を澄ませるとそれはイスラームの聖典であるクルアーン（コーラン）の読誦であった。

四、五年前にエジプトのカイロで携帯電話が普及し始めたころ、待ち受け画面にクルアーンの章句をあしらった画像が表示されているのを見て驚いた。ところが今度はインドネシアであっという間に「着うた」で読誦が出回る時代になっていた。

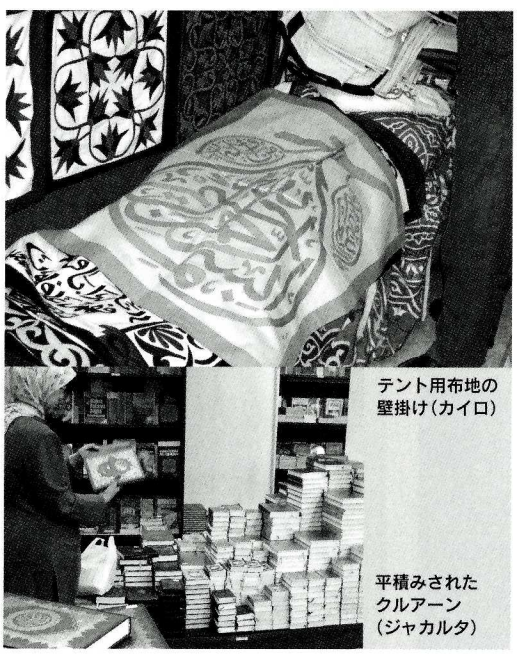
クルアーンは聖典なので、イスラーム世界に行けばむかしからどこにでもある。書物だけではなく、読誦されることによっても広がっている。モスクの装飾に使われたり、説教や会話のなかで繰り返しその章句が引用されるのはもちろんのこと、最近ではさまざまなグッズとしても広く愛好されている。消費社会が進んだ都市ではステッカーやカード、ポスター、キーホルダーなどがよく見られるし、伝統工芸を生かした壁飾りや置物、電灯などの室内装飾品、装身具、お守りなども一般的である。観光などでイスラーム圏を訪れたときに、タクシーのバックミラーにぶら下げられたお守りを見た覚えがないだろうか。

普遍性と地域性

これらのグッズは宗教心の発露であることもあれば、文化的なアイデンティティをあらわしていることもある。種類は豊富で、さまざまに趣向が凝らされている。例えば、ヘナでコーティングした木片の腕輪は、東南アジアのある島の特産品であり、これにクルアーンの章句をあしらったものは、ある村で少量だけ作られている。あるいは小さな天然石の薄板に針の先ほどの太さで章句が刻まれたものは、エジプトの隠れた名品である。その一方で、エジプトの名物パピルスのクルアーン・ポスターとなると、土産品として広く出回っているし、パレスチナのヘブロンが産地である陶器の皿もイスラーム世界中に輸出されている。章句がデザインされた貴金属のペンダントトップはもっともポピュラーなもののひとつで、各地で生産されている。

ところで、これらのグッズはどこの地域で見付けても、章句がアラビア語で書かれているので、すぐにそれとわかる。というのも、クルアーンはアラビア語で誦んで書くというルールになっており、たとえアラブ圏を離れ東南アジアに行っても、常にアラビア語のままなのである。中国土産の数珠状の腕輪は、赤、黒、白の珠が連なっていかにも中華風なのがものめずらしく愛らしいが、刻まれたことばはやはりアラビア文字であった。ムスリム（イスラーム教徒）たちに共有されている普遍的な聖典クルアーンは、多種多様なグッズとして、イスラーム世界の各地の日常生活のなかに顔を見せている。

ステッカー。「議論をするときはもっともよいことばを用いなさい」



テント用布地の壁掛け（カイロ）

平積みされたクルアーン（ジャカルタ）

人生は決まり文句で

食物には食べる人の名前が書いてある

金谷 美和
（かねたに みわ）
本館外来研究員

ダナ・ダナをごちそうに

「食物には食べる人の名前が書いてある」、という言い回しを初めて聞いたのは、ある工房の親方の口からであった。わたしはインドのグジャラート州カッチ地方でイスラーム教徒の染色職人集団の調査をしていた。その工房を主たる調査場所と決めて、毎日通ううち、親方の奥さんから、うちで食事をとるように言われ、食事時に行かないと、どうして来ないの？と電話がかかってくるようになった。

ダナ・ダナとは、原義は芥子菜（からしな）などの種のことで、毎日の食事のことを意味する。カッチでは小麦粉あるいは雑穀粉をこねて薄く伸ばして焼いたマニとよばれるものが主食である。それに野菜や肉の入った汁気の多い煮物、ミルクの脂肪をとり除いて発酵させた飲み物を添える。

その家で毎日食事をするようになったある日、わたしは感謝の気持ちと遠慮を伝えるために、「毎日ごちそうになって、あなたにご迷惑をおかけして申し訳ありません」と言った。それは日本人らしい言い方だったかもしれない。それに対して親方は、「あなたは迷惑なんてかけていませんよ。だって、食物には食べる人の名前が書いてあると言うではないですか。この食物にはあなたの名前が書いてあるのです」とカッチー語による言い回しで答えてくれたのである。

結婚式のために遠方から来た客とともに朝食を囲む

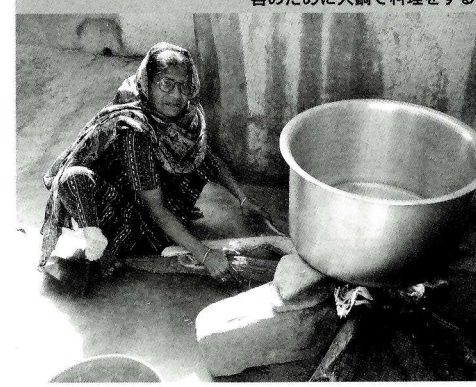
土地に縛られない人生

最初、わたしは、この言い回しを、客に対する寛大さやもてなしを示すことばと理解していた。しかしそのうち、どうやらそれとは違うらしいと思うようになった。また、このカッチー語の言い回しは、日本語による、先に「つばつけた」人に優先権がある、というような食物に対する所有や権利の観念とも違うようだとも考えた。

なぜなら、この言い回しには、食物があるところに人は行く、という意味があることがわかってきたからだ。つまり、わたしがカッチにやって来たからカッチの食物を食しているのではなく、わたしの食べるべき食物がまずカッチにあり、その食物の存在に引かれてわたしの身体がカッチに移動してきたのだということだ。運命のようなものであるが、運命は人の身体に刻印されているのではなく、その人の食べる物に刻印されているという考え方である。

このような言い回しの背景にあるのは、おそらくカッチ人が移動することの多い人びとだということである。カッチは降水量が少なく、安定した農業収入を期待することができない。そのために、牧畜や、商業、手工芸が発達した。いずれも人が移動することで成り立つ生業である。染色職人たちも、必要に応じて村から村へ、またカッチの外の世界へ、アラブ諸国や東アフリカへと移住をおこなってきた。

明日は、どこに行くか。そのような、土地に縛られない人生を示しているのがこのカッチー語の言い回しであり、フィールドワーカーとしてのわたしの人生にとっても、ぴったりの決まり文句だと思っている。



客のために大鍋で料理をする

外国人として生きる

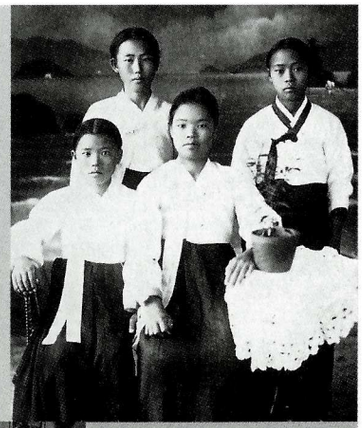
84歳、今が青春
—呉福徳（オ・ボクトク）さんの異郷暮らし（タヒャンサリ）66年

金 美善（キム・ミソン）
本館外来研究員

大阪市平野区に生活する在日コリアン一世、呉福徳さんの生まれ故郷は韓国の全羅南道（チョルラナムド）。一九四一年一八歳のときに日本にいる故郷の男性と結婚して来日した。今年で日本での生活六六年をむかえる。八四歳になる呉さんの毎日の楽しみは、お昼前から友達とデイハウスに集まり一緒にすごすこと。日本語と故郷のことばを織り交ぜながら気ままな会話をし、韓国風のおかずとキムチ、もちろん食べなれた日本料理も楽しめる。懐かしい韓国の民謡を歌い、それに合わせて踊ったり、毎日が楽しくまさに今が青春だと、呉さんはいう。

日本ではじめて呉さんが定住したのは京都府の天橋立。当時、日本全国の朝鮮人人口は約一五〇万人といわれ、呉さんの周りにも朝鮮人が多く生活していた。夫の仕事は、ダムや幹線道路をつくる土木の肉体労働であった。夫の両親や兄弟六人家族と同居しながらの、特に女性の労働量が多かった時代だった。子どもが生まれると、家族の世話や畑仕事に子育てがくわわった。それでも、周りの朝鮮人と早くから共同体生活を築き、何とか切り抜けてきた。たとえば冠婚葬祭の負担を軽減するための「ケ」という相互扶助のシステム、さらに家族全員や隣同士で助け合えた子育てには、コリアン同士の結束と異郷暮らしにおける同郷意識が生活の底辺にあった。

子育てが終わった頃、友達と一緒に奈良へ


来日前に故郷の友達と

夜間中学校の仲間と博物館にて

デイハウスに集まった友達と（左手前が呉福徳さん）

文字をしらぬ辛さ

しかし、子どもが生まれ、学齢期になると子育てでどうしようもないこともあった。呉さんが日本語の読み書きのできない非識字者であったことである。多くの在日コリアン一世、特に女性の場合、当時の経済事情や故郷の社会的慣習で学校教育に恵まれず、日本語の読み書きができない人が多い。呉さんも例外ではなく、韓国でも日本でも学校経験がない。そのため子どもの学校からの家庭通信や連絡が理解できず、学校への持ち物の用意をしてやれずに、子どもには何度もかわいそうな目にあわせたという。そればかりではない。日本社会で文字の読み書きができないことは、単に情報入手の不便さという物理的な障害だけではなく、社会に対し劣等感と疎外感を感じさせるものでもあった。

子どもの学校行事や授業参観には仕事の忙しさにくわえ、恥ずかしさから参加できない場合も多くあったが、それでも呉さんがあきらめずがんばったのは、子どもの学校教育であった。子どもの将来を教育に託すと同時に、呉さん自身が学校教育の経験がないこと、十分に習えなかったためでもあった。それでも呉さんには、異国生活を切り抜ける特別な生活戦略があったらしい。子どもが、読み書きができるようになると、学校行事や日程など書面の内容を親に理解させることからはじまり、学校との書面でのやりとり、役所関係の書類上の仕事まで任されることになった。小学校低学年から子どもの役割は他の日本の家庭とは違い、社会的に弱い親を守ろうとする気持ちも育っていったようだ。

夜間学校との出合い

ところで呉さんの生活する平野区は、日本でも在日コリアンがいちばん多く居住する大阪市生野区と接する。天橋立から大阪に移ったのは夫の仕事の都合であった。大阪では夫を早くなくして、自営業の子どもの仕事を引退するまでずっと手伝った。日本語が読めない呉さんにとって、複雑な都会生活はさらに大変だったという。買い物も、電車に乗るのも怖かった。

ところがある日、友達から読み書きを教えてくれる学校があると聞いた。中学校の夜間学校であった。戦後の混乱期に義務教育をうけることができなかった人たちを対象に設置された公立中学校の夜間学級であるが、外国人にも門戸が開かれ多くの在日コリアン一世の女性が在籍していた。六〇歳を過ぎてからの中学生、初めて学ぶ日本語の読み書きであった。やがて、ひらがな・カタカナを学び、自分の名前が漢字で書けるようになったときの感激は一生忘れることができないという。ハングルの読み書きを覚えるようになったのも夜間学校であった。授業が始まる夕方が待ち遠しく、よほどのことがない限り休むことはなかった。夜間学校で読み書きを身に付けたおかげで、やがて時間がかかるが新聞が読めるようになった。そして日記をつけたり、自分の思いを書いた作文が民族団体のエッセイコンテストに入賞したりもした。

そればかりではない。今まではまったく無意味な世界だった街角の看板の内容がわかるようになり、子どもの助けなしに、一人で病院にも旅行にも行けるようになった。いつの間にか駅の周辺や街角にハングルの看板が増えていることにも気づくようになった。自分の国のことばや文字が日本の看板から発見されたときは驚いて、うれしかったという。読み書きができるようになってから、いろんな社会の変化に気づくことができた。

変わり始めた日本社会

今考えてみると、呉さんの歩んだ日本生活は、日本の外国人の歴史だったかもしれない。来日当時の生活は、貧しさや社会的視線がとてもつらく過酷でさえあった。過酷だったぶん、濃密な家族関係や共同体を保ち続けホスト社会に適応する自助的な生活戦略を見せた。社会的弱者であったからこそ、感じる人情のありがたさも人二倍である。日本語がわからなかったから助けてくれる人が多く、教えてくれた人も多かったという。

とはいえ、植民地支配の時期、被支配者として来日し、生活してきた当時と今とを比べると、今の日本社会の彼女たちへの考え方や態度も大きく変わったと思っている。それの裏づけだろうか、日本に生活する朝鮮半島出身者への呼称も何度も変わった。鮮人、朝鮮人、在日朝鮮人、在日韓国朝鮮人、在日、在日コリアン。これらの変化を一言で整理するのは難しいが、確かにいえることは、この社会が在日コリアンであることをネガティブに意識しなくてもいい方向に向かっていることだ。少なくとも呉さん自身は、自分が朝鮮半島の出身者であることを隠す時代ではないと思っている。

それでも呉さんに「今が青春」を感じさせるのは、やはり楽観的で、前向きに、強く生きる彼女自身の性格にあるのだろう。そしておそらく、何千人、何万人の呉さんのような在日コリアン自身が今までの日本社会を変え、そしてこれからも変えていく原動力の一部となっていくのは間違いないようだ。

民博で開催した
「アラビアンナイト大博覧会」

地球を集める

民博 アラビアンナイト・コレクション

西尾 哲夫
（にしお てつお）

本館民族社会研究部

世界的ベストセラー

アラビアンナイトの題名のもとに世界中で親しまれている物語集が成立したのは、今から一〇〇〇年ほど前のバグダッドだった。日本でいうと平安時代にあたる。この当時、すでに中国から中東に紙が伝わっており、バグダッドでは大量の紙が流通していた。羊皮紙の場合、一冊の本を作るには何頭ものヒツジが必要だったが、紙は比較的安価に大量生産することができた。アラビアンナイトの冒頭部分が記された紙の断片が残っており、これは九世紀のものであることがわかっている。

ただし、当時の中東では今のような出版業があったわけではない。本はすべて手で書き写されていた。個人で本を買うということはあまりなく、本は公共や私立の図書館に収められていた。また貸本屋の数も多く、代金を払って蔵書を読むこともできた。当時の代表的な文学者であったジャーヒズは、読書好きが高ずるあまりに貸本屋をまるごと借りきったといわれている。彼は棚から崩れてきた本の下敷きになって死んだという話も伝わっているのだが、こちらは事実ではなくて伝説だろう。

アラビアンナイトは生まれ故郷の中東ではしだいに忘れられていったのだが、一七世紀フランスの東洋学者アントワーヌ・ガランが、一五世紀ころに書かれたと思われるアラビア語の古写本をたまたま入手してヨーロッパ世界に翻訳紹介した。一七〇四年のことだ。ガランが訳したアラビアンナイトはヨーロッパの人びとが知らなかった空想の世界をえがいていたから、あっという間にベストセラーになり、英語やドイツ語をはじめとするヨーロッパ各国語に次々と翻訳されていった。こうして中東で成立した空想物語集であったアラビアンナイトは、ガランの翻訳をとおして世界文学へと生まれ変わっていく。日本には明治時代に紹介され、今ではディズニーの映画などをとおして、読んだことはなくとも名前くらいなら誰もが聞いたことがあるはずだ。

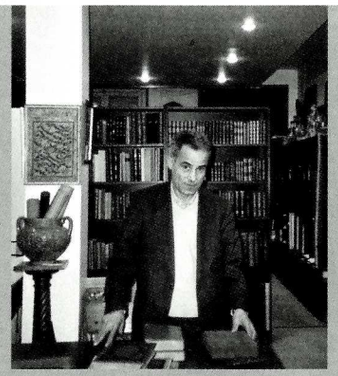
初版本一二巻を求めて

アラビアンナイトがヨーロッパに紹介されてから三〇〇年後の二〇〇四年、民博では「アラビアンナイト大博覧会」を開催した。この博覧会に展示するため、ヨーロッパ各地からさまざまなアラビアンナイト本を集めることになった。ヨーロッパ最初のアラビアンナイトであり、文化史上で大きな役割を果たすことになったガラン訳の初版本は、何としてでも手に入れたかった。

アメリカやヨーロッパでは特定の古書を情熱的に収集している人が多い。めずらしいものになると、一冊数百万円、はては数千万円などという古書もあり、愛書家をめぐったミステリーなども書かれている。

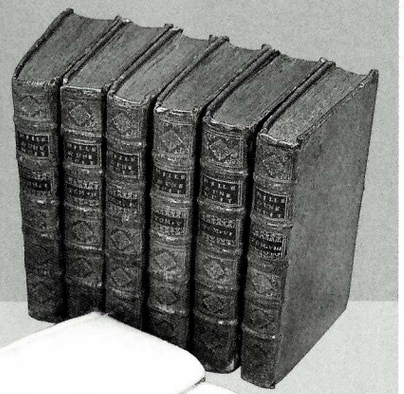
パリには数多くの古書店があり、それぞれが専門の分野をもっている。古書店は詳しいカタログを出しているところが多く、客はこのカタログをチェックしてめあての本を探すわけだ。ガラン訳アラビアンナイトは全部で一二巻が出版されており、当然ながらこちらとしては一二巻すべてを手に入れたい。ガラン訳アラビアンナイトは当時のベストセラーだったし、その後も版を重ねており、現在でもフランスの子どもたちの愛読書になっている。これほどの有名な全集なのだから、一二巻セットは専門の古書店なら必ずもっているはずだ。

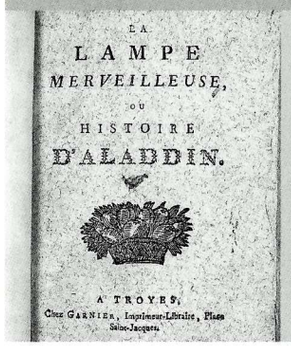
チャップブック
『シンドバード』『アラジン』『アリババ』
19世紀初め グラスゴー　民博所蔵
チャップブックとは民衆向けの廉価本のことで、チャップマンとよばれる行商人が村々を回って売り歩いた。文字だけのものから粗雑な挿絵の入ったものまであった

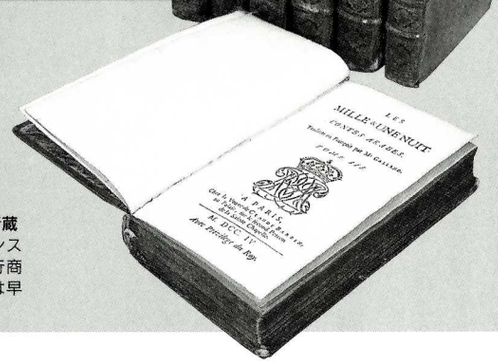


パリの古書店アベンセラージュの主人。フランスで出版されたアラビアンナイトを収集しており、わたしの最大のライバル

『千一夜』A・ガラン訳
1704～1717年 パリ　個人蔵
ガラン版『千一夜』の初版本。貴婦人方が、「ガラン様、はやくお続きを！」と催促するほどの大ベストセラーとなった







『不思議なランプ、
あるいはアラジンの物語』
1760年ごろ トロワ（フランス）　民博所蔵
「青本」とよばれる民衆本。とくにフランス中部のトロワでは青本印刷が盛んで、行商人が売り歩いた。アラジンやアリババは早くから人気のある定番の題材となった

パリの古書店で収集

だが、この予測は甘かった。どこの古書店も一二巻セットはもっていないのだ（ちなみにパリ国立図書館にも欠本があり、世界のどの図書館も完本を所蔵していない）。それでも一二巻のうち、一〇巻まではもっているという古書店を見つけ出し、何回か足を運ぶうちに主人と少し親しくなった。さらに何回か通うと、今度はコーヒーを出してもらえるくらいにはなった。こういう買い物では、インターネットでボタンをクリックしたり、スーパーマーケットで欲しいものをカゴに入れたりするようなわけにはいかない。商談がはじまるのは、ある程度の信頼関係が築かれてからなのだ。

コーヒーを出してもらったところで、おもむろにガランのアラビアンナイトの話をきりだした。主人にしても、こちらの目的はとうに見当がついている。主人が答えるには、確かにガランのアラビアンナイトはもっている、もってはいるが全巻がそろうまでは売らない、客にも見せないと言う。表情はにこやかだが絶対に売る気はなさそうだ。それでもいろいろとねばるうちに、「あそこならもっているかも」という同業者を紹介してもらった。

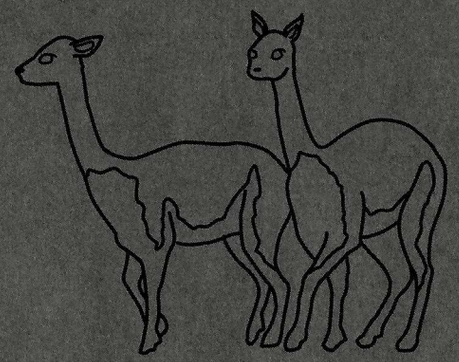
さっそく、そこの店に行ってガランの話をきりだした。同業者の名をもち出されて主人がそわそわしはじめた。やがて部屋のなかをうろうろ歩きまわり、とうとう意を決したように奥の部屋に入っていく。戻ってきた主人の手には七巻目までの本があった。ひととおりの値段交渉をすませ、その場で買い求めたのは言うまでもない。

後日、最初に訪れた古書店に行き、紹介してもらった店で七巻目までを手に入れたと報告した。主人の目が丸くなった。本当にもっているとは思っていなかったらしい。いくらで買ったのかと探るような目でたずねてくるので、実際に買い求めた値段よりも少し安く言っておいた。主人は信じられないというような表情のまま、店から送り出してくれた。

苦労して手に入れたガラン訳アラビアンナイト七巻は、「アラビアンナイト大博覧会」で展示された。現在、民博には世界に誇るアラビアンナイト・コレクションがあり、世界の研究者に利用されるべく詳細なデータベース化が進められている。

生きもの博物誌

【ビクーニャ】
南米・アンデス山脈



ビクーニャの保護と村おこし

大山 修一
（おおやま しゅういち）

首都大学東京 助教

高価な毛と乱獲

アンデス山脈にはリャマとアルパカという家畜が飼育されているが、近縁の野生動物ビクーニャとグアナコが生息する。ビクーニャは三八〇〇メートル以上の高地草原に生息し、分布域はペルー北・中部からボリビア、アルゼンチン、チリ北部の山岳域である。ビクーニャの毛は直径一三～一四ミクロンであり、アルパカ（二二ミクロン）、リャマ（二六ミクロン）、グアナコ（一八～二二ミクロン）と比較しても繊細である。二〇〇六年の時点では、一キログラムのアルパカ毛が五ドルほどであるのに対して、ビクーニャ毛は約五〇〇ドルで買い取られていた。

インカ時代には、大規模な集団猟によってビクーニャは生け捕りにされ、毛刈りされたのち、野に解放された。こうした狩りは、その場所を変えながら、各地区で四年ごとにおこなわれ、毛質の維持と個体数の増加が図られた。ビクーニャ毛はすべてインカ王に献上され、王がその一部を王族にわけ与えた。庶民はビクーニャ毛を身につけることは許されず、この禁を破れば、死罪に処された。スペイン人が到来する以前である一五〇〇年ころの推定頭数は二〇〇万頭である。その後、乱獲により生息頭数が減少し続け、一九六五年にはペルー国内で六〇〇〇頭にまで減少した。

住民主体の保護活動

ビクーニャを保護するため、ペルー政府は一九六七年に国立自然保護区を設定した。しかし、ビクーニャの毛は高額で取引され、密猟にさらされる危険性があった。ドイツの援助を受け、保護区では密猟を防ぐために、武装警備隊が組織された。このような保護システムによって保護区の頭数は一九六九年に二六四七頭だったのが、一九八〇年には一万八三三五頭へと増加している。しかし、周辺住民の家畜を強制的に保護区から追い出そうとしたため、住民と政府の関係は悪化し、一九八一年にはドイツの援助も停止した。さらに、一九八三～一九八九年にはテロ活動が活発になり、保護区の管理は完全に放棄された。

政府当局者たちは、武装警備隊によって広大な地域をカバーすることは不可能であることを認識し、住民主体によるビクーニャの保護と利用が考え出された。一九九〇年代に入って治安が回復すると、保護区の周辺村はレンジャーの組織化を進めるとともに、毎年六～九月には一〇～三〇回ほどの集団猟を実施している。多くの村びとが集団猟に参加し、ビクーニャの毛を刈り取っている。一頭から刈り取られる毛は一〇〇～二五〇グラムである。ビクーニャは、毛刈りののち、ふたたび野に放される。わたしの調査村では毎年、一五〇キログラム以上の毛が販売され、その売上金は村の裁量でレンジャーの給与、集団猟の参加者への日当、ビクーニャ保護のためのインフラ整備、村びとの生活向上にあてられる。

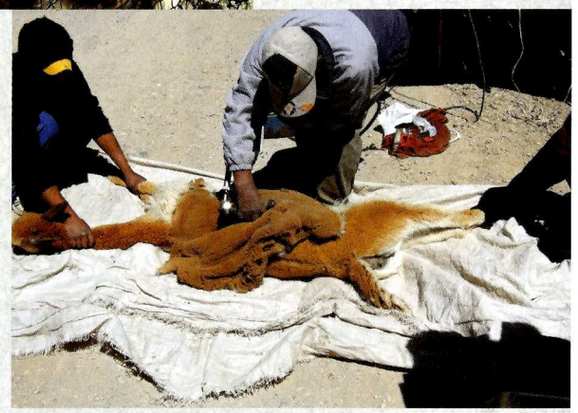
保護区ではビクーニャの生息頭数が過剰になり、草地への負荷が大きくなってきたため、ペルー政府の指導のもとでアンデスの村むらへ移送されている。一九七九～二〇〇〇年までに移送された頭数は二七五〇頭におよび、ペルー国内では一一万九〇〇〇頭（二〇〇〇年）にまで回復している。現地住民によるビクーニャの保護、集団猟と毛の販売が、貧困と過疎にあえぐアンデス農村の村おこしにどのようにつながるのか、注意深く見守っていきたい。

ビクーニャの群れ

集団猟。カラフルなビニールがついた紐をもち、横列になってビクーニャを追い込んでいく

生け捕りにされたビクーニャ

電気バリカンによる毛刈り。その後、ビクーニャはふたたび野に放たれる



ビクーニャを保護するレンジャー。密猟者とのあいだで銃撃戦になることもあり、ライフルと拳銃、双眼鏡は必携である

ビクーニャ（学名：*Vicugna vicugna*）

ラクダ科。体重30～45キログラム、体長80～110センチメートル。南米のラクダ科動物4種のうち、体がもっとも小さい。遺伝学的な研究により、アルパカ（*L.pacos*）はビクーニャと、リャマ（*L.glama*）はグアナコ（*Lama. guanicoe*）と、それぞれ近縁性が高いことが明らかになっている。学名は*Lama vicugna*と記されることもある。ワシントン条約では附属書IIに分類され、商業取引には輸出国の許可が必要である。インターネットでは、ビクーニャの毛で織られたスカーフが25万円、毛布が315万円で販売されている（2007年現在）。

［フィールドで考える］

音楽は国境を越えて

錦田 愛子（にしきだ あいこ）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
非常勤研究員

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤー・コンサートといえば、西洋クラシック音楽を愛する者としては一生に一度は行ってみたい、憧れの舞台だ。わたしはそこまでクラシック好き、というわけではないが、父の影響で子どものころからなんとなく演奏会に足を運ぶことが多かった。この春にはたまたまウィーンに行く機会に恵まれて、コンサートの会場であるウィーン楽友協会ホール（ムズィーク・フェライン）に立ち寄ってきた。

残念ながら演奏を聴くことはできなかったが、会場内部の見学ツアーに参加してきた。ニューイヤー・コンサートが催されるゴールデン・ホール（大ホール）は、収容人数は一〇〇〇人と意外に少なく、こぢんまりとした造りだった。第二次世界大戦の破壊を免れたという建物は、一九世紀の建築当初の様式をそのまま生かしており、木目がむきだしのステージや観客席は、少し古びた印象を与える。しかし名前のとおり金色に統一されたホールは、天井が高く荘重で、柱の優美な女神像には音響効果もあるという。いかにもクラシック音楽の殿堂らしい雰囲気を十分にかもし出していた。

インドからウィーンへ、そしてイスラエルへ

帰国後しばらくして、めでたく博士の学位をいただけることになった。自分へのご褒美として選んだのは、今年のニューイヤー・コンサートの指揮者ズービン・メータが率いるコンサート。曲目はドヴォルザークの交響曲第九番「新世界より」と、リヒャルト・シュトラウスの「ツァラトゥストラはかく語りき」。大学院を修了し、関東で新生活を迎えようとする自分にとって、「新世界」とはなんとなく語呂もいい。

演奏は申し分なく、すばらしかった。会場のサントリー・ホールは満席だった。終了後、コンサートに誘っていただいた先輩と一緒に食事に出かけたが、ここはインド出身のメータに敬意を表してインド料理にしよう、ということになった。知らなかったのだがメータはインドのムンバイ（ボンベイ）の生まれらしい。父親のメーリ・メータもまた指揮者で、ボンベイ交響楽団の創立者である。メータ自身は十代後半から留学し、ウィーンで音楽を学んだ。

しかし同時に、メータはイスラエルとも関係が深いことで知られる。実際、メータは今回の奏者であるイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団で、一九六九年から音楽顧問を務めている。イスラエル国内のヘブライ大学、テルアビブ大学などから名誉博士号を授与されているそうだし、「一年のうち三ヵ月をイスラエルで過ごす」との話も聞かれる。コンサートのパンフレットでは、彼とイスラエル・フィルの密接な関係が強調されていた。

後で調べると、彼はゾロアスター教の家系だということがわかった。ゾロアスター教といえば、イランで紀元前七世紀に始まった宗教で、信徒の一部は八世紀ごろインドへ移動したという。ムンバイを中心に、現在も「パールシー」とよばれる集団が一〇万人規模で存在するとされる。そういえばメータもムンバイ出身だ。そう考えると、この日の演目である「ツァラトゥストラはかく語りき」もにわかに意味深いもののように思われてきた。「ツァラトゥストラ」とはゾロアスターのこと。もちろんこの曲は、ドイツの哲学者ニーチェの書いた本を原作としている。ニーチェの作品とゾロアスター教の教義とは直接関係がないとはいえ、メータにとってこの曲名は何か独特な連想を促すニュアンスをもっていたりはしないのだろうか。自己のルーツを匂わせる、第三者による作品を、演奏に向けてふたたび自分が解釈し表現していく。芸術作品という媒介項をとおしたこの不思議なやりとりを、彼はどう感じていたのだろう。

イラン発祥の宗教の家系に属し、インド出身のメータが、ウィーンで音楽を学びイスラエルのオーケストラを指揮する。それを日本人でイスラエルの隣国ヨルダンで調査をしたわたしが、ウィーンを訪れた後に日本で鑑賞する。クラシック音楽をめぐる国境を越えた移動の現状は、かくも複雑な事態にまでおよんでいる。

越えられる国境、越えられない壁

音楽をめぐる越境という点については、かつてわたしは感動的な場面に遭遇したことがある。それはわたしの調査地であるパレスチナ難民キャンプでの出来事だった。ヨーロッパから来たプロの楽団のメンバーが、キャンプの子どもにボランティアで楽器演奏の指導をしていた。音響設備も何もない簡素な部屋で、プラスチックの椅子を積み上げて譜面台の代わりにして、バイオリンのレッスンがおこなわれていた。少し前に転んで手を怪我したという少年は、はじめてのレッスンに夢中だった。表情は真剣そのもので、レッスンの合間に挟まれる英語とアラビア語交じりの説明に必死に耳を傾けている。その音色はもちろんまだたどたどしいものではあるが、わたしは彼の目の輝きに強く胸を打たれた。長いあいだフィールド調査をしてきたが、これほどまでに真摯で純粋な輝きをもった瞳を見たのははじめてだった。

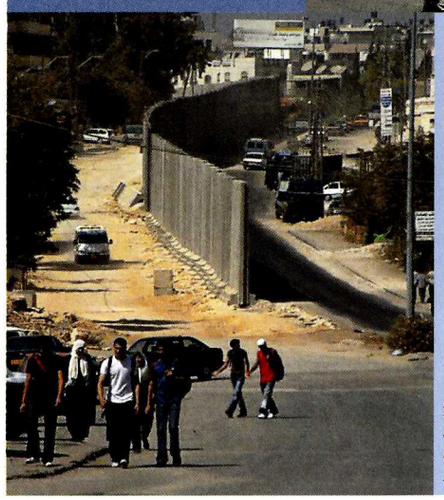
同じ年ごろの少年が、イスラエル軍の侵攻に際しては抵抗の石を投じることもある。それを「テロリスト」の予備軍とみなしたり、「子どもを盾にしている」と批判する声も聞かれる。だが彼らに石を握らせるのは何なのか。楽器を握らせてやさしく教えてあげれば、こんなにも素直に喜びを顕にする子どもたちが、あえて石を握るのは、むしろ彼らをとり巻く日常に問題があるからではないだろうか。

文化交流の面では、ほかにも国境を越えた協力の例が見られる。日本もパレスチナで文化施設の建設を支援し、地元の人に喜ばれている。しかし政治の面ではいまだ厳しい分断が続く。イスラエルとパレスチナとのあいだには高さ八メートルのコンクリートブロックがそびえ立ち、物理的な障壁として両者の生活圏を遮断している。両政府のあいだの外交交渉は断絶して久しい。こうした分断が続く限り、紛争の解決は遠く、日常生活をめぐる状態が改善する見通しも暗いだろう。

日常化するトランスナショナルな移動や交流の一方で、ローカルな交流や交渉すら困難な閉塞状態。これらの並存するいびつな様相が、グローバル化社会の現状といえるのかもしれない。

パレスチナ難民キャンプでは
ヨーロッパから来た楽団の
メンバーが、キャンプの子どもに
ボランティアで音楽指導をしていた

日本の寄付で
パレスチナ自治区に
できたコンサート・
ホール。前の通りは
「東京通り」と
よばれている



治安目的としてイスラエルが
パレスチナ自治区との
あいだに建設を進める分離壁。
人びとの生活を分断している

開館30周年記念事業

みんぱく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう

30周年記念として、1年間にわたっておおくりする「研究者と話そう」。
6月も毎週おこないます。研究者との話を気軽にお楽しみください。

実施日・話者・話題・場所

6月3日(日)
長野 泰彦（民族文化研究部教授）
チベットのポン教
於：南アジア展示

6月9日(土)
池谷 和信（民族社会研究部教授）
ビーズの魅力
於：アフリカ展示・東南アジア展示・アイヌの文化展示

6月10日(日)
小長谷 有紀（研究戦略センター教授）
映画「蒼き狼」のモンゴル国での評判
於：中央・北アジア展示

6月17日(日)
山中 由里子（民族文化研究部助教）
イラン人の余暇の楽しみ方
於：展示場内休憩所

6月23日(土)
劉 明基（外国人客員教授）
韓国の老人問題
於：展示場内休憩所

※以後の予定は、ホームページ等でお知らせします。

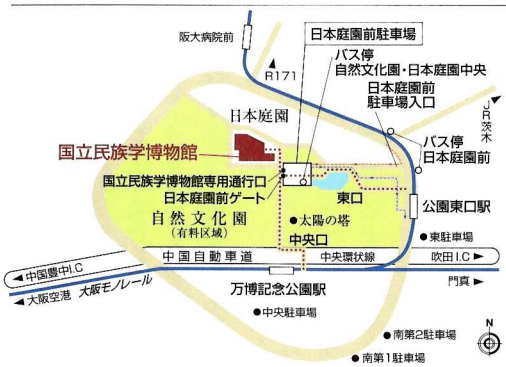
■時　間：14:30～15:30（予定）
■参加費：無料（ただし、観覧券が必要）

＊ 毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。
ただし、自然文化園を通行して来館される場合は、自然文化園の入園料が必要です。

編集後記

晴天続きの5月に梅雨の水無月を思い浮かべるのは難しい。発行日と発行号がほぼ一致している本誌でさえそうなのに、実際の発行日を先取りしている大方の雑誌では、時節ものに引き付けた編集後記などの執筆はさぞかし大変だろう。これは、流通事情の悪かった時代のなごり、他誌を出し抜くため、再販売制度の期限の延長をねらった、などの理由からしい。あまりに先走るのを制限しようと、日本雑誌協会が、月刊誌は40日先を超えて発行してはならぬと定めていることを、初めて知った。

時節ものと言えば、今年は民博開館30周年にあたり、様々な催しが予定されている。これを機に読者の皆様にも民博に足をお運びいただきたい。と言うのも、2004年の法人化以降、効率化、市場原理導入という大波が、それには馴染みにくいと思われる文化・学術分野にも押し寄せているからである。人文系の研究は、知的好奇心から出発するものであり、促成や速効を求めるのではなく長い目で見守ってもらわないと面白い成果は出てこない。遊び心を持った面白好きの方々の応援なくしては成り立ちにくい民博の諸活動へのご支援を、引き続きお願いしたい。　（久保正敏）



交通案内

■大阪・千里万博記念公園内
●大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分（茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

月刊みんぱく

次号予告／7月号特集
化粧

2007年6月号　第31巻第6号通巻第357号
2007年6月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151
発行人　朝倉敏夫
編集委員　池谷和信（編集長）　樫永真佐夫
久保正敏　庄司博史　山中由里子
協力　財団法人 千里文化財団
制作　株式会社博報堂
製版・印刷　アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます